

## 国交樹立への道 —長いトンネルを抜けて—

鯉 淵 信 一

### はじめに

日本とモンゴル国が1972年2月に外交関係を樹立して早くも50年という歳月が流れた。

当時のことは鮮明に記憶している。その一カ月ほど前から「国交樹立近し」という記事が新聞紙上で賑わせはじめた。学生時代からモンゴル世界に魅かれて、この日が来ることを夢見ていた私は興奮しながら各紙を集めてむさぼり読み、スクラップブックに記事を張りつけた。交渉は2月15日からわずか3回の協議で19日に合意に至り、24日には正式文書の署名がなされて国交が開かれたのである。それまでは容易に埋まらなかったモンゴル関連記事のスクラップブックが、交渉経過を報ずる記事でまたたく間に一杯になったことを覚えている。

それから50年、両国関係は政治、経済、文化、通商などあらゆる分野で目を見張るばかりの発展を見せている。1年に10人にも満たなかった人の往来は延べ2万人に達し、在日のモンゴル人は1万人を越え、留学生も数千を数える勢いだ。一方で大使館開設時、崎山臨時代理大使ご夫妻と私の3人だけだった在留邦人は数百人を数えるという信じがたいほどの進展ぶりだ。

しかし国交樹立に至るまでには暗くて長いトンネルの時代があり、一方で途切れそうな細い糸を繋ぐための地道な努力が続けられてきたのである。国交樹立以降の動きについては、それぞれの専門分野から多くの論考が提示されることであろうし、また外交記録は外交専門家に譲るとして、ここでは私なりの視点で長いトンネルの時代を振り返ってみたいと思う。

### モンゴルは「遠い世界」 —— 私の学生時代

両国関係を第二次世界大戦後に絞って振り返ってみると、大きく四つの時期に分けることができそうだ。第一期はまったく交流の窓が閉ざされていた戦後から1950年代半ばまでの約10年間、第二期はそれから国交樹立までの10数年間で細々とした交流下に国交樹立を模索した時期、第三期は国交樹立からモンゴルの民主化までの約20年間で文化協定締結や日本の援助でカシミヤ加工工場が建設されるなど協力関係の基礎が築かれた時期、そして第4期はモンゴルが社会主義体制を脱してから現在に至る、両国関係が飛躍的に進展し

た時期である。

私の学生時代は1963～67年の4年間、両国が外交関係を求めつつもトンネルから容易に脱し切れずにいた第二期のど真ん中だった。すでにモンゴルは国連に加盟し、日本とも細々ながら交流はあったが、しかし日本人にとっては遠い世界だった。モンゴル人にとっても状況は同じで、日本は「未知の国」だった。

大学で選択科目としてモンゴル語を選んだが、取り立てて関心があるわけでもなかった。中国に多少の関心があって中国語クラスを覗くと受講生で一杯、中国との間に所謂「LT貿易」と呼ばれる民間貿易が始まった時期で中国語ブームの真っ盛りだったのである。受講生の多さに嫌気がさして隣のクラスを覗くと、学生数人を前に先生がモンゴル世界を楽しそうに語っていた。その雰囲気魅かれて席を置くことになったが、これが私のモンゴルとの出会いだった。

先生は麻生達男という戦前の内モンゴルで西北学塾の教授を務めていたモンゴル語の達人だった。教科書は先生の手作り、辞書は図書館備え付けのものを共有するという寺子屋式のような授業だった。先生のお人柄と講義に引き込まれて関心は徐々に高まっていったが、モンゴルに関する書籍は戦前のものばかり、もちろんネイティブのモンゴル語を耳にする機会もなかった。「モンゴル語を勉強している」と友人に話すと、「モンゴルって、どこにあるの?」という反応、せいぜい「チンギス・ハーン」、「遊牧」、「ゴビ沙漠」くらいの知識だった。もちろん私も同レベル、モンゴル語で就職先があるとも思えず勉強にも身が入らなかった。



オリンピック選手団を横浜港に送る 1964年

大きな転機になったのが1964年の東京オリンピックだった。モンゴルが初参加でレスリング、体操、自転車、射撃などの競技に30人余の選手団を送ってきた。私はクラス仲間と代々木の選手村や朝霞の射撃競技場にモンゴル選手を訪ねた。しかし言葉が通じない。身振り手振り、覚えて行った単語を並べて応援の意志を伝えるのが精一杯、そこに通訳官のゼネメデル氏が現れて選手との仲を取り持ってくれた。発足早々の日本モンゴル協会が催した新宿「隋園」での歓迎会に参加して選手たちと交流を持ったりもした。こうしたオリンピックでの出会いが私のモンゴル人との交流事始めで、これを機にモンゴルへの関心が急速に高まった。ゼネメデル氏はその後も原水禁大会などで度々来日し、国交樹立後には大使館の参事官を務め、民主化後は映画プロデューサーとして超大作映画「マンドハイ」などの制作に関わった。私とはずっと交流が続き、「マンドハイ」の日本上映のお手伝いもしたが、まさにオリンピックが取り持った縁だった。

それ以降、モンゴルから代表団が来ると聞けば大きなテープレコーダーを抱えてホテルに押しかけ、この本を読んでくれ、モンゴルの歌を歌ってくれと強引に頼んだりした。頼まれもしないのに街を案内したりしたが、当時来日したモンゴル人のほとんどは、私のこうした迷惑な攻撃を受けたはずだ。今でいう所謂「追っかけ」だ。モンゴル人の来日は原水禁大会や通商代表など年に10人にも満たず、ほとんどがイルクーツク、ハバロフスク経由でナホトカからソ連船で横浜にやって来た。「オルジョニキーゼ号」という船名を記憶している。このナホトカ航路は1962年に開かれて92年に廃止されるまでの30年間、日本・モンゴル間の交流を支えた。

次第にモンゴルを旅したい、暮らしてみたいという思いが高まり、さまざまな手段で入国許可を働きかけた。外国との交流窓口だった平和委員会(平和友好諸団体連合)に手紙を送ったり、来日する代表団に助力を求めたり、ついにはツェデンバル首相に手紙を送ったりもした。無知な学生だったわけだが、一度だけ平和委員会から電報が届いた。期待に胸を弾ませて読んでみると、「国交がないので招くことはできない」というもので、ひどく落胆したのを覚えている。

モンゴルと貿易をしている商社や外務省を訪ねては、「モンゴルの新しい情報はないか」と聞いて回ったりもした。当時はノンビリした時代で、学生相手にどこでも話し相手になってくれ、「こんな資料があるよ」とか「こんな代表団が来るぞ」と情報をくれた。外務省ではモンゴル担当官の崎山喜三郎氏、商社では八重洲交易、和光交易、国際貿易促進協会(国贸促)などにずいぶんお世話になった。また後に日本・モンゴル協会に発展する「東光会」というサークルがモンゴルに関する勉強会を開いていた。面白い話が聞けるので欠かさず出席していたが、そこに若者の姿をみることは皆無だった。東京・神田のナウカ書店にはモンゴル書籍も置かれていたが、陳列棚はいつも同じものが10冊ほど並んでいるだけだっ

た。1963年に旅行公社ジョールチンと日ソ・ツーリストビューロー間で「ツーリスト協定」が結ばれ、南ゴビ、ホジルト・カラコルムなどの観光コースや価格も設定された。しかし日ソ・ツーリストビューローを通じて観光目的でのビザを何度か申請したが、結局ビザは下りなかった。招待された代表团や特定の目的を有する以外、一般人は訪問自体が不可能な時代だったのである。

モンゴルでも日本語を勉強するのは困難な時代だったようだ。日本語を教える教育機関はなく、日本語を勉強しようとするれば1950年代には北京に、60年代にはモスクワに留学した。当時来日した日本語通訳は戦前の日本統治下の内モンゴルで日本語を学んだ人がほとんどだった。平和委員会のアルマース、貿易省のガルサンジャップ、科学アカデミーのハンドスレンといった方々で、先のゼネメデル氏がモスクワ留学組の第一期生ではなかったかと思う。

### 細々と交流はじまる —— 1950年代半ばから

前述したように第二次世界大戦終結から10年間は、ほとんど没交渉の期間だった。唯一、両国赤十字社間に日本人抑留者の帰還問題に関する連絡網があったに過ぎない。人の往来がはじまり、限られた範囲だったが情報が入ってくるなど交流がはじまるのは1950年代半ばのことになる。

春日行雄編『日本とモンゴルの百年』によれば、日本人の最初のモンゴル訪問は1956年で石川達三、村松梢風、芥川也寸志といった著名な芸術家12人がモスクワで開催されたアジア連帯文化会議参加の帰途、ウランバートルに立ち寄ったことにはじまる。わずか3日間の滞在だったが日本を代表する彼らの訪問は、モンゴルという国を日本人に思い起こさせる良い機会となった。村松梢風は帰国後に『外蒙を訪ねて』（青木書店）を著している。

同1956年には「原爆の図」で有名な画家の丸木位里・俊夫妻がウランバートルで展覧会を開いた。丸木夫妻は67年にも展覧会を開いており、モンゴルが毎年、広島、長崎の原水爆禁止大会に代表团を派遣するなど原爆の悲惨さ、日本人の原爆への思いをよく理解する国の一つになる大きな役割を果たした。60年代半ばには吉村公三郎監督の「その夜は忘れない」という原爆映画が「広島石」(*Hiroshimagiin chuluu*)という題名のもとモンゴルで上映されて人びとに大きな感銘を与え、また70年代末には「原爆は危険」(*Bömbög delbervel ayuultai*)や「折り鶴」(*Tsagaan shuvuu*)という原爆の恐ろしさ、平和への思いを込めた歌が盛んに歌われたが、これなども「原爆の図」に繋がるものであったろう。また56年には毎日新聞と共同通信の記者2人が初めてウランバートルを取材し、57年には朝日新聞のモンゴル取材も実現している。

貿易が始まるのもこの時期である。1956年に日中貿易交渉で北京を訪問した国貿促の

代表団がモンゴル大使館との間に貿易促進の覚書を交換し、58年に外国貿易省輸出入公団と国貿促の間に貿易議定書が結ばれて開始した。ただ当時は1年ごとに代表団を派遣し合って商談をするという悠長なものだった。日本側は国貿促を窓口に東京銀行を中心に12,3の会社がモンゴル部会を組織して臨んだが、台湾(中華民国)との関係から大手商社はダミー会社を使って貿易をするという状況だった。68年にはモ・中関係の悪化を受けて窓口が国貿促からソ連東欧貿易会に変わり、輸送ルートも天津からナホトカ経由に変更された。日本の輸出は主に自動車タイヤ・チューブ、モンゴル側は馬毛が大部分で他に毛皮、獸毛などであった。貿易額は往復200万ドルを目標としたが59年には1万8500ドル、62年に17万3000ドル、66年に70万3000ドルと徐々に増加はしたが実に微々たるものであった。国交樹立前に100万ドルを超えたのは68年と70年だけだった。

また1959年には精松源一、坂本是忠、小澤重男らモンゴル研究者が第1回世界モンゴル学者会議に参加した。この研究者らの見聞報告はモンゴル理解に大きな貢献をした。

一方、モンゴルからは1956年にグンジャムツ労組中央評議会副議長が総評大会参加のため来日したのが最初になる。そして翌57年には著名な歴史学者ダムディンスレン教授、原子物理学者で後の科学アカデミー総裁のソドノム教授ら5人が原水爆禁止大会参加のため来日し、広島をはじめ大阪、京都、東京などを巡り、研究・教育機関を訪れて多くの学者と交流を深めた。

帰国後にダムディンスレン教授は『日本訪問記』(*Yaponii tukhai temdeglel*)を発表した。日記風の記録で実に正直に肌で感じた日本の文化、人びとの暮らしを紹介している。まだナホトカ航路は開かれておらず、北京、香港を経由し、入国ビザ待ちも含めて20日ほどかけて日本に辿りついたわけだが、教授は「外国に来たのではなく故郷を訪ねて友人に会っているような思いになった」とその印象を書いている。料理店のメニューを紹介し、刺身を食べられない者がいたとか、日本の家は靴を脱ぐからきれいな靴下をはかないといけなとか、ユーモアを交えつつ日本の文化を伝えている。また外国代表団を招いた外務省主宰の会食会で藤山外相に「モンゴルの国連加盟を支援して欲しい」と要望したことなども記述されていて興味深い。当時、モンゴルにとって日本は公式的には《米帝国主義の一員》であり、反日記事がウネン紙上を飾っていた時期だったが、教授の文章はモンゴル人に日本への文化的関心を高めさせただろうと思う。一方で遠路はるばるやって来た教授らの来日は、日本のマスコミに盛んに取り上げられてモンゴル紹介に貢献した。

また『日本訪問記』には、前年にも原水禁大会参加のためモンゴル代表団が香港までやって来たが結局、日本からのビザ発給がなく帰国を余儀なくされたという記述があり、モンゴル側がきわめて積極的に日本側に交流を求めていたことがわかる。モンゴルはダムディンスレン教授らの来日以後、原水禁大会には毎年欠かさず代表団を送り続けてきた。

モンゴル人に愛されている詩人やポーホランも日本との文化交流に貢献した一人だ。彼は訪日経験はなかったが、1953年に「東京の夜」(*Tokiogiin shōnō*)という詩を発表している。戦後の貧しく暮らす日本女性を東京湾の船上から眺めている情景の詩である。また彼は日本の俳句に強い関心を示し、66年に「俳句形式の詩について」(*Yaponii khaiku khelberiin shūlgiin tukhai*)という論文を発表するなど、俳句の面白さを盛んに紹介した。自身でも四季を題材に俳句形式の3行詩をいくつも発表している (*Yapon khaiku mayagaar bichsen dōrvön ulirliin shūleg*)。また56年には日本のプロレタリア文学の短編を集めた『赤旗の下で』、60年には夏目漱石の『坊ちゃん』がロシア語から重訳されてウランバートルで出版された。

1950年代はこうした散発的な交流はあったが、「国交樹立」という声を聞くことはなかった。

### モンゴルの国連加盟で交流が一步前進 — 国交樹立が政治的テーマに

1960年代に入ると、両国関係は一步前進する。61年のモンゴルの国連加盟によって「国交樹立」という政治的テーマが具体性を持って浮かび上がってきたのである。

日本はモンゴルの国連加盟に賛成の意思表示をしたものの、主に台湾との関係から国交樹立には踏み込まず「事実上の承認」の立場を取っていたが、国交への準備は進めた。外務省が国連加盟を前にして1961年9月に秋保、武藤両書記官を初めてモンゴルに派遣し、またモンゴル関連情報の収集や出版を本格的に始めたのである。主に木村肥佐生の訳による『モンゴル人民共和国憲法』、『モンゴルの選挙制度』、『モンゴル人民共和国関税法』、『モンゴル統計集』、党中央委員会の宣伝員必携書『モンゴル人民共和国』(上・下巻)などの出版、また外務省編集による『モンゴル人民共和国便覧』(日本国際問題研究所)、新聞報道などを翻訳・編集した『モンゴル年報1961年版』等々の発行である。先の両書記官の『モンゴル視察記』、また崎山喜三郎の「モンゴルをめぐる外交関係」(『共産圏問題』)などの発表もそうした流れの一環である。

1962年7月には朝日新聞社モスクワ特派員がモンゴルを取材して近況を連載し、また日本電波ニュース社も同時期に現地取材し、TBSテレビを通して「知られざるモンゴル共和国」と題して特別番組を連続放映するなど報道も盛んに行われるようになり、国交樹立を求める声も徐々に広がり始めた。63年1月には池田首相が国会答弁で、「国連総会における日本代表のモンゴル加盟賛成により、事実上の承認」と明言した。さらに63年にはWHOの要請で国立がんセンターと東京女子医科大学が2人のモンゴル専門医師の研究留学を受け入れたりもした。

1963年には先述したモンゴル・ジョールチンと日ソ・ツーリストビューローとの間で民

間の「ツーリスト協定」が結ばれたりもしたが、しかし実質的な観光旅行は実現しなかった。国交樹立以前、純粋な観光でモンゴルを訪問した日本人は皆無ではなかったかと思う。

こうした中で1964年にモンゴルが東京オリンピックに初参加、30人余の選手団が来日したことは交流促進の弾みになった。ある選手が電車でスリにあってお金を盗まれるという事件があり、これが報道されて支援金が寄せられるということもあった。こうした話題もモンゴルの存在を日本に紹介するのに役立った。当時のモンゴルの人口はわずか100万人程度、それが30人もの選手団を送ってきたのである。対日関係への意気込みが伝わってくる印象だった。

モンゴルへの関心が高まるなかで64年9月には、それまで勉強会的なサークルだった「東光会」を発展させて「日本モンゴル協会」(理事長・松崎陽)が設立された。同協会は翌65年には社団法人となり、平和委員会との間に信頼関係を築き、代表団が来日するたびに懇切に接遇し、両国政府、政治家間の橋渡し役を担い、機会あるごとに政府首脳に国交樹立の重要性を訴えるなど活発な運動を展開した。

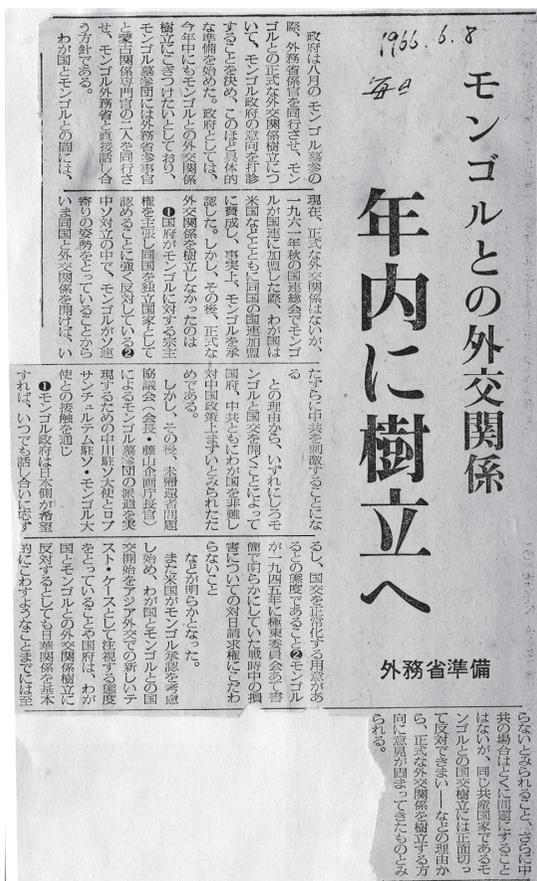
こうして徐々に交流が深まる中で、1965年に外務省の崎山、花田両書記官が国連婦人セミナー参加を名目に訪モしてモンゴルの実情を調査した。また日本・モンゴル協会に続いて65年には社会党、総評系の日本・モンゴル親善友好の会も発足している。同会は68年に日本・モンゴル親善協会になり野党の立場から交流推進に尽力した。この二つの協会による働きかけは「国交樹立」への側面支援となった。このようにモンゴルの国連加盟以降、交流の幅を拡大したが、具体的な「国交樹立」交渉が開始されるには至らなかった。

### 日本人抑留者墓地への墓参実現 —— 国交樹立へ大きなステップ

国交樹立への具体的進展がないなかで1966年8月、第二次世界大戦後にモンゴルに抑留され、かの地で亡くなった日本人墓地への政府墓参団派遣が実現した。これは国交樹立への大きな弾みになった。この年7月に発生したトーラ河の大洪水に対して日本が見舞金を贈与し、また同月に外務省内でモンゴル語研修が開始されたことなども国交交渉を念頭においた動きであったろう。

墓参実現には日本・モンゴル協会、特に自身も抑留経験者であった春日行雄の尽力は両国交流史に記録されている。彼は自らのメモと記憶をもとに各地に眠る1600柱余の名簿と埋葬場所の地図を作成し、また抑留体験者の会を組織するなどして厚生省や赤十字社はじめ各政党に熱心に墓参を訴え続けた。墓参問題は公的には厚生省と未帰還者問題協議会が窓口になり、在モスクワ日本大使館が交渉を担って進められた。モンゴル側は墓参団の受入れが国交樹立への大きな足掛かりになることを強く認識していたのであろう、当初から対応はきわめて好意的であった。墓参団は長谷川峻代議士を団長に遺族代表7名、外務・

厚生両省係官4名、NHKや共同通信の記者2名を含む本格的なもので、特に外務省からは1961年に初めてモンゴル入りした秋保課長補佐が加わるなど現地での国交協議をも想定した陣容であった。



墓参を機に国交への機運高まる

日本人が特別な感情を抱く墓参をモンゴル側が好意的に受け入れたことは日本側に好印象を与え、各メディアがモンゴルを盛んに紹介するきっかけを作り、「外交関係を早期に樹立すべきだ」という世論を盛り上げた。明日にでも国交樹立が実現するかなのような新聞報道もあったりするなど、1960年代に国交樹立への機運がもっとも盛り上がったのは、この墓参実現の時だったと思う。

墓参を機に政府および国会の動きが活発化し、国会で度々「国交樹立」問題が取り上げられ、また水面下での政治交渉も本格化した。政府は表面的には慎重姿勢を取りつつも国交樹立を前提に動いていたのである。日本のこうした動きに対して台湾政府は反発を強めた。三木外相が国会で「国交を前向きに考えていく。台湾からは何ら制約を受けない」(1967年4月)と発言したが、結局、台湾の強い反発、国内の親台湾派の動き、さらに中ソおよび

モ中関係の悪化など周辺環境も整わず国交樹立へ踏み出すことは出来なかった。しかし69年7月には桂木鉄夫、山口敏夫ら超党派の国会議員団が訪モするなど、交流レベルが一段と引き上げられた。

一方でモンゴル側は早い段階から日本に国交樹立を呼び掛けてきた。最初の呼びかけは1957年5月のモ・ソ共同声明およびモンゴル外務省スポークスマンの談話での表明とされるが、その後も機会あるごとに前向きな意向を示してきた。ツェデンバル首相自身が日本のメディアとの会見に積極的に応じ、その度ごとに「日本との国交正常化に障害はない」と強い希望を表明するなどしていた。そして日本で開催される国際会議に積極的に代表団を派遣するなど、さまざまな機会をとらえて早期の国交樹立を促してきたのである。

例えば、1961年3月には東京でのAA作家会議に著名な作家で国連加盟時の首席代表でもあったD. ツェベグミド（後に国立大学学長、副首相など歴任）ら3人が来日し、67年にはエカフェ東京総会に党中央委員候補のチミドドルジ第一外務副大臣、ホスバヤル駐インド大使らが来日して小川外務省アジア局長ら会談し、翌68年には先の日モ親善協会発足に当たってアディルビシ平和委員会委員長が来日して長谷川峻代議士や小川局長らと会談して国交樹立を促してきた。同年にはILO東京会議にラムスレン労相、69年にはヤダムスレン労組中央評議会議長などモンゴル要人の来日が続き、モンゴル側は一貫して国交を求め続けた。原水禁大会には1957年から継続してハイレベルの代表団を送ってきたが、その意図も国交樹立を促すことにあったと言える。ツェデンバル首相は69年9月に訪モしたアマチュアレスリング代表団（団長・山口久太）との会見にも応じて国交樹立への強い意向を示した。

そうした中で1970年8月、これまで来日した中で最高位のゴンボジャブ副首相が大阪万博参加を名目に日本政府の招待で来日した。滞在中に愛知外相、木村官房副長官、川島自民党副総裁ら政府、与党首脳らと活発に会談した。もちろん国交樹立への重要な地ならしだった。これに対して日本側は71年9月に副首相訪問の答礼として中島茂喜代議士を団長とする政府代表団がモンゴルを訪問した。同代表団には外務省の中江アジア局参事官のほか2名の担当官が同行し、ルブサン第一副首相、リンチン外相らと会談した。さらに同年10月にはツェレンツォドル外務省局長が来日して詰めの協議が行なわれた。

こうして国交樹立への道筋が整い、残すは国内外の情勢などのタイミングを見極めるという状況となったのである。

## ようやく国交樹立へ

日本は長く国連中心主義、アジア外交重視を掲げて外交の柱にしてきたにもかかわらず、モンゴルの国連加盟から10年余にもわたって国交樹立に踏み込めなかった。両国間に横た

わっていたハルハ河戦争、第二次世界大戦時の賠償問題や戦後の日本人抑留問題などの二国間問題は協議の積み重ねのなかでほぼ合意に達していたが、複雑に絡み合う両国を取り巻く国際関係が大きな制約を課していたわけだ。詳述は避けるが、台湾政府によるモンゴル宗主権の主張、日本と台湾間の歴史的、人的な深い結びつき、また日中関係の動向、東西冷戦下での日ソ関係の悪化、中ソ対立下のモ中関係の悪化、米中、米ソ関係等々が直接的、間接的に影響を与えていたのである。

そうした状況を一変させたのが1970年に始まった米中接触である。米中交渉が本格化し、71年に中国が国連に加盟して安保理常任理事国入りを果たすと日中間の国交正常化が必然のこととなり、一方で台湾と国家関係を維持することは不可能な状態となった。こうして台湾問題は大きな障害ではなくなり、またニクソン米大統領の訪ソ（71年10月）に見られる米ソ協調の動きを受けて、中国の文化革命以来大使引き揚げまで悪化していた中モ関係も大使がそれぞれ帰任するなど改善の方向に動き出し、さらに5年間中断していた日ソ協議も再開されるなど周囲の環境も大きく改善されたのである。

そうした中で1972年1月25日に日ソ外相協議の席上、福田赳夫外相がグロムイコ外相に「モンゴル承認」の意向を表明し事態は急展開する。2月15日からモスクワ駐在の両国大使間でわずか3回、計3時間にも満たない短時間の協議で国交樹立は合意に達したのである。これまでの長い地道な接触の積み重ねの過程で最大の懸案だった賠償問題をはじめ交渉すべき実質的な問題はほぼ解決済みだったということだ。

両国間の国交樹立は、双方にとって対外関係強化の上できわめて意義深いものであった。日本にとってはアジアにおける社会主義国の中で最初のものであり、日本のアジアを中心とした多角外交の先鞭をつけたものであり、しかもアメリカに先駆けてのものであった。アジア重視かつ多面的な自主的外交を目標にしていた当時の日本にとって大きな外交的成果だった。対アジア外交の幅を広げ、またアメリカ追従外交という非難を払拭し、自主的な積極外交を示すことになったのである。さらには後に続く日中国交正常化への大きな弾みにもなった。

モンゴルにとっても、日本との国交樹立は外交の幅を広げて国際的地位を向上させるというモンゴル外交の基本目標を強化する上で極めて大きな役割を果たすものとなった。当時、モンゴルに大使館実館を置く西側の国は英国、フランス、インドの3カ国に過ぎなかったことをみても、日本との国交樹立がいかに重要だったかがわかる。さらにこれまでソ連を中心としたコメコン諸国からの支援のみに頼っていた経済を、日本との経済協力を強化することによって国内経済の安定・発展につなげるという大きな成果を得た。日本の報道各社はこぞってモンゴルとの国交樹立に「歓迎」の評価を示した。

翌1973年6月にはウランバートルに日本大使館が開設され、同年12月には東京にモンゴ

ル大使館が設置されて名実ともに国家間交流が始まった。こうして両国間には新しい時代が到来したのである。

### 花開く交流 ～ 結びに代えて

国交が樹立されると観光の扉が開かれ、1974年には文化協定が結ばれて人的交流が進み、また77年にはカシミヤ・ラクダ毛加工工場建設の経済協力協定が結ばれるなど経済交流も拡大していった。同工場は81年に完成をみるが、西側からの初の本格的援助で5か年計画にも組み込まれてモンゴル経済の重要な柱となり、同時に両国間協力のシンボリックな役割をも担うことになった。

しかしその後は新たな経済協力はなく、政治面での交流もさほど進展しなかった。米中ソの政治駆け引き、日ソ、中ソ対立の中でモンゴルはソ連支持の立場を堅持して日モ関係が後退する場面さえもみられた。こうした関係はゴルバチョフの「新思考外交」の展開によって東西冷戦が終結し、中ソ和解が始まる1980年代後半まで続く。それを象徴するように両国間には国交樹立後15年間も外務大臣の相互訪問さえも実現しなかったのである。

ようやく1987年5月、ゴルバチョフの「ウラジオストック演説」(1986年7月)で東アジア情勢が大きく変化するなかでドゥゲルスレン外相の来日が実現して交流促進に弾みがつくことになる。翌88年には日本から40社以上が参加する大型経済ミッションが訪モし、さらに翌89年5月には宇野外相の訪モが実現して80年以来中断していた貿易協定締結交渉の再開、経済協力協議に向けて日本側経済代表団の訪モ、両国経済委員会の強化などが合意され、また日本側から技術協力面での専門家の派遣やモンゴル人専門家の研修受け入れ等の援助が約束された。さらにモンゴル側の強い要請で90年から航空路が開設されるに至った。当面は夏季のチャーター便のみのフライトであったが、中ロ以外に出口を持たないモンゴルにとって画期的なことであった。

こうした流れの中でモンゴルでは日本への関心と期待が大きく膨らみ、それを象徴するかのように1989年1月からはモンゴル国営ラジオが日本語放送を開始するに至る。週2回で1回30分という短時間の放送だったが、人口200万人余の国として大事業であった。また科学アカデミー内に日本研究センターが開設され、国営テレビが初めて日本取材を行なうなど日本への関心は大きな広がりを見せ始めた。そして90年2月、民主化運動が急拡大する最中にソドノム首相が初来日し、さらに11月には天皇陛下の即位礼にオチルバト大統領が参列するに至った。

そしてついに1991年8月、日本のみならず西側首脳として初めての海部首相のモンゴル訪問が実現した。海部首相はモンゴルの民主化とソ連崩壊で窮地に陥った経済に本格的な支援の手を差し伸べ、さらに国際社会に呼びかけてモンゴル支援国会合を立ち上げた。詳

述はさけるが、これを機に日本のODAを中心とした支援が本格的化し、またこうした支援活動の広がりを受けて両国間の交流は民間レベルを含めて急速に拡大し現在に至っている。

\* \* \*

国交樹立の翌年6月、ウランバートル・ホテルに日本大使館が開設されたが、私はそのお手伝いに崎山臨時代理大使に随伴してウランバートル赴いた。

50年前のウランバートルは、激しく躍動する現在の姿からは想像もできないほどに静かで、のんびりとした街だった。ウランバートルの夏は夜10時過ぎまで太陽が落ちない。当時は街の地図もなかったので、夕食後にノート片手にブラブラと散歩がてら簡単な地図を作って歩いた。食料品店、本屋、薬屋、靴屋、理髪店、映画館、レストラン、文房具店等々…ノートに書き込んだ店は今ではほとんど姿を消してしまった。

古いノートを眺めながら今、懐かしいウランバートルの街風景を思い起している。